

# 101. 下部消化管穿孔の診断エラーの頻度と要因：多施設後ろ向き研究

## 研究の概要

診断エラーは、医療安全および医療の質の観点から注目されており、様々な疾患で研究がなされております。下部消化管穿孔は、急性腹症の一病態で、初期診断が遅れると腹膜炎や敗血症を来し、重篤な結果を招きます。そのため、迅速な診断・治療が求められますが、下部消化管穿孔に関する診断エラーの頻度や診断エラーに関与する因子に関する研究は、少ないのが現状です。そのため、下部消化管穿孔の診断エラーの頻度ならびに診断エラーに関与する因子を明らかにするための研究を昭和大学江東豊洲病院総合診療科が中心となり、熊本医療センターも参加することといたしました。

## 研究の目的と方法

今回の研究は、下部消化管穿孔の診断エラーの頻度と診断エラーに関与する因子を明らかにすることを目的とします。本研究は、昭和大学病院救急医学科、順天堂東京江東高齢者医療センター総合診療科、獨協医科大学病院総合診療科、昭和大学江東豊洲病院総合診療科の多施設後ろ向き研究です。本研究では、2015年1月1日～2019年5月31日に国立病院機構熊本医療センターを受診された患者さんのうち、病名もしくはCT読影レポートで下部消化管穿孔と診断がついた方を対象としています。15歳未満、虫垂炎、穿孔部位不明、上部消化管穿孔、医原性消化管穿孔の方は除外いたします。研究対象症例は、約100名です。日常診療で得られたデータを電子カルテから集計いたします。

## 本研究の参加について

これにより、患者さんに新たな検査や費用の負担が生じることはありません。また、研究で扱う情報は、個人が特定されない形で厳重に扱います。その他研究に関してご質問がごいます際は、末尾の問い合わせまでご連絡ください。

## 調査する内容

本研究は、新たに試料・情報を取得することはなく、既存カルテ情報のみを用いて実施する研究です。研究対象者(患者さん)の個人情報(氏名、住所、電話番号、カルテ番号など)は、記載せず、対応表を作成して管理しますので、個人情報は特定されません。

## 調査期間

調査対象期間：2015年1月1日～2019年12月31日

研究実施期間：倫理委員会承認～2021年3月31日

## 研究成果の発表

研究代表者は、研究終了後、遅滞なく研究精査を学会や判論文で発表いたします。  
また、個々の患者さんのデータ発表するときも、個人が特定されることはありません。

## 研究代表者

昭和大学江東豊洲病院 総合診療科 原田拓

## 当院における研究責任者

国立病院機構熊本医療センター 総合診療科 辻隆宏

## 問い合わせ先

国立病院機構熊本医療センター 総合診療科 辻隆宏

TEL: 096-353-6501